

---

# 夏の暑さと夜の星

brades

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏の暑さと夜の星

### 【ZPDF】

Z0044Z

### 【作者名】

b r a d e s

### 【あらすじ】

全く、何でこりも暑いんだ？

SOS団の活動は現在休止中だが、こんななんじや外に出るひともできん。

ん？古泉か？何だ、相変わらず顔が近いぞ、むを苦しい。  
え？ハルビが？やれやれ、またあいつか。

(前書き)

今回は夏をテーマにして、タイムリーな話を書いてみました。

カラカラに乾いた空気と共に晴れて、夜でも星が大分見えるようになりましたね。

そんな作品に仕上がっているはずです。（え

それについても暑いですね（；・・・）

まるで欲しいものを手に入れた子供のように嬉しそうにカンカン照らしつける太陽が、俺の一切のやる気を奪っていく。

そう、今は8月。

夏休み真っ最中だ。

最近の日本は異常気象だ異常気象だと騒がれているが、そんなことどうでもいいと思いつつ、梅雨という梅雨が無かつたり6月の段階で30度をゆうに超えたりした今年を恨めしく思いながら、俺は家でのんびりくつろいでいた。

少しばかり外に出ないと体力が急激に落ちると懸念されても、どうしても身体は動こうとせず、エアコンガンガンで扇風機を強で付け、半ばできるだけ外に出ない方が良いと言った詐欺的な天気予報士に責任を転嫁し、果てしなくインドアに向かっている真っ最中だ。

こつ暑いと、家で何をするわけでもなく、ただいたづらに時間だけが過ぎていくことがしばしばだ。

ん？ ハルヒか？ SOS団は現在活動休止中。どうせ中旬になればまた強制召集がかけられるんだろうが、8月上旬には特に活動は無く、それぞれの時間を過ぎてしているのだ。

そういうえば去年は8月が1万云回繰り返すハメになっていたつけな。今となつては良い思い出さ。

そしてあの春の出来事があつてからといつもの、古泉曰く「閉鎖空間が発生しなくなつた」 そうだ。

まだ僅かながらハルヒの超じ都合主義的パワーは残つているが、春から未だに閉鎖空間は発生していないらしい。

やれやれ、あの時はさすがに頑張ったからな。長門もあの一件の後、しばらく学校に姿を見せなかつたが、学期末にはいつもの本を読む姿を見せていた。

まあ、こんなことはまたの機会に話せば良い。  
それより、誰かこの暑さを何とかしてくれ。我が親愛なるお母上は、「28度以上にすればエコになるのよ」となんとも理不外かつ身勝手な意見を押し通し、それ以下の温度に下げることもできない。  
全く、エアコンが効いてる気がしないぜ。

そしていたゞらに時を過ぎ、と4時間ほど。  
もう辺りは暗くなつてきて、だんだん暑さも身を潜め、闇に埋もれてくる。

さあて、今日もむづ終わりかと晩御飯まで何をしようか考えていたところ、

「キヨン君にお酒を～。

妹が入ってきた。

おいおい、いつも言つてるじゃないか。入るときはノックくらうし  
ろ。それとアイスを食べ歩きしながら喋るんじゃありません。

そんなこんなで玄関まで行くと、・・・何で俺はこんなにもコイツ  
に好かれてるのかね。

こんな真夏に野郎の顔なんぞ見たつて暑苦しおが2倍になるだけだ  
ぞ、古泉。

「それはそれは、申し訳ありませんでした。僕としても今日せみつくり過ごすはずだったんですが、少し用ができましてね、貴方を訪ねたところといふのです。」

「まさか・・・閉鎖空間か?」

「いえ、閉鎖空間はあの日以来出現していません。ただ、こここの涼富さんが暑さのせいか、元気が無いようで、我々としても少々困つてこらるというわけなんですよ。」

なるほど、やうござばお前等はハルヒのセラピストみたいな存在だつたな。

・・・とにかく、お前等はどんなだけハルヒの監視してるんだよ。プライバシーの字も無いのかよ。

「つまり、また俺に振りつつてわけか。」

「実は、涼富さんは現在この近くの公園のベンチに座つていらっしゃるのですよ。」

何?何でアイツがここまで来てるんだよ?

「さて、何故でしじゅうね?本能がそいつさせた、ヒコのロマノチックすぎるでしょうか?」

待て待て、何だそのしてやつた顔は。そんな説明で理解するほど、俺は頭良くないぞ。

「まあ、すぐ近くにいるなら好都合や。わざわざアイツに会つて行く

のは面倒だからな。」

何よりハルヒの家を知らんしな。

公園に来るとい、古泉の言ったとおり、ハルヒはベンチに腰掛けてしまつとしていた、いりこひのを確か・・・物思いにふけるつてんだけか？

「よひ。」

「・・・・・あんた、こんなとこで何してんのよ。」

どちらかと言えばこんな所に居ておかしいのはお前だろが。  
まあ、当たり前だが、そんなことを言えばただちに非難されるわけ  
で。

「特に何もやつてない。近所だから散歩してただけさ。」

「・・・・・よひ。」

おーいハルヒさん？この前も言った気がするんだが、そんな長門み  
たいな反応されても困るだけなんですが。

「お前は何やってんだ？」

「あたしもやつと歩きたくなっただけよ。」

そんなんで電車に乗つてまでここに来たのかよ。

別に理由はあるんだが。ま、そこまで聞くことはほんない。

「いくら外が暑いからって、いつまでもこんなとこで油売つてたら風邪引くぞ。それに夜道は危ないんだしな。」

「・・・星を眺めてたのよ。」

ハルヒは半ば焦点の定まつていないうつな目をした。  
いつもならばお前はそんなロマンチストだったか？などの切り替え  
しをするんだが、そんな展開ではないと思い、俺は言葉を選ぶ。

「何だ、何か考え方でもあつたのか？」

「・・・思い出したのよ。・・・4年前のこと。」

4年前・・・七夕のことか？

「あたしは夏の大三角、ベガ、アルタイル、デネブ。その星を見つ  
けてあることを願つっていた。忘れられないあの日。・・・」

間違いないな。おそらく、俺がジョン・スミスを名乗つた時のこと  
だろう。一時バレそうになつたことはあつたが、あの時はハルヒの  
勝手な想像で隠せたはずだ。

「ある」とつてなんだ？誰か会いたい男でもいたのか？

我ながらギリギリの質問をしちまつた。一步間違えれば大惨事だ。  
こんな時に言葉が出てこない自分を恨む。

「……あの日と今日、別々の人のことを考えていたわ。でも今日は……」

そこから沈黙するハルヒ。言いたいことが分かる気がする。だが、それを聞いて俺はどう思うのだろうか？

俺もハルヒも沈黙する中、一体どれだけの時間が経つたであろうか。

「今日は……その願いが叶った日だった。」

「……え？」

「……もう大丈夫よ。あたしはここにいる。」

ハルヒはそう言って俺に微笑みかけた。

・・・それこそ忘れられない、いつものハルヒには見られない優しい笑みだった。

帰り、さすがに仮にも女性一人で歩かせるわけにはいかないと、送れるところまでは送つてやつた。自転車に乗つけてる最中、

「……鈍感」

と、小さな声で聞こえた気がしたが、気のせいだったのだろうか？

「……で良いわよ。」

「おへ、真っ直ぐ帰れよ。気をつけてな。」

「うん。・・・ありがと、キヨン。」

「あ・・・」

有無も言わせず、ハルヒは走り去っていった。全く、あいつにこいつにこいつにまだもハルヒらしげにな。

夜に照らされた薄い光。頭上に見える幾多もの星に俺は語りかける。

「俺は・・・ここにいる。」

君達はこの夏の夜、満点の星空を見たら何を願うだろつか?  
俺の願いはあの春から変わっていない。

俺は・・・ハルヒと共に歩みたい。

(後書き)

とこりわけで、いかがでしたでしょうか？

ハルヒとキョン、お互い何の言葉も無くても、心は繋がっているん  
でしょうね。

気づかぬ間にお互いを求め合っていたみたいですね。

熱いですな（：・` ˘ `）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0044n/>

---

夏の暑さと夜の星

2010年10月11日13時43分発行